

「やっぱり、韓国語が混じるんですよ。途中で重要な単語が韓国語であつたりするとこつちが、勝手に解釈してしまつたりして困るんです。」

これは在日コリアン認知症高齢者施設で介護支援者から聞いたことばである。事実、いまままで日本語を不自由なく使っていた人も老うにつれ次第に日本語をわすれ韓国語へシフトしはじめる場合が多いという。ことばだけではない。習慣も食事も若いときの好みも泉のごとくわかあがつてきて、周囲の人と文化的摩擦が生じがちなようだ。

### 高齢化するコリアン二世の介護施設

日本の朝鮮半島植民地支配に由来する在日コリアンの歴史は一〇〇年にもおよぶ。第二次世界大戦期来日したコリアンの子孫が四、五世にまで世代をかさねる一方、本国で幼少期をすごしたあと日本で辛苦にたえ生き抜いてきた当の一世は高齢期を迎えている。日本人にくらべ、家族の絆の強いコリアン社会においても、核家族化、伴侶との死別、子どもの転勤などで一人暮らしを余儀なくされる高齢者が増えつつある。しかし故郷に帰るに帰れないコリアン二世にとって、家庭以外で同胞同士が安心して生活できる環境を補償することは容易ではなかった。

一九八〇年代後半、在日高齢者の孤独死が相次いでいた。異国で迎えた人生最後の時間を安らかに過ごしてもらいたいと、尹基氏（現・社会福祉法人こころの家族理事長）が朝日新聞に寄稿した「韓国人専用の老人ホーム設立の訴え」が注目をよんだ。文化人や福祉専門家たちの協力のもと韓日を用いることの少ないコリアン入居者にとっては楽しい時間である。そのため、日本のケアワーカーたちは、韓国からの研修生を貴重な存在として捉えている。

一方で、「故郷の家」は地域とのつながりも重視している。コリアンデーをもうけ、地域の方々に「故郷の家」や韓国文化に触れてもらう機会を提供しており、韓国の食べ物販売や、韓国の伝統芸術の公演、民族衣装の試着等、文化交流を図っている。そのうえ、暮らしのなかに「オンドルと畳、アリランと演歌、キムチと梅干」など、韓国と日本の文化を取り入れ、どちらにも対応できるのは「故郷の家」ならではの特徴であるともいえる。

その後もこのような在日コリアン高齢者向け老人ホームは増え続けている。尹理事長はその後、一九九四年から二〇〇九年にかけて老人ホームのほか、介護サポートセンターやケアハウスを大阪、神戸、京都に次々と開設し、在日コリアンの文化に配慮しつつ、在日コリアンと日本人の共生ホームとして運営している。今度の目標は、「故郷の家・東京」の建設だという。

### 在日外国人の高齢者施設のモデルとして

二〇〇九年四月に、「故郷の家・京都」が竣工した。これはケアハウスも併設している。ケアハウスには、特別養護老人ホームに入居する人より比較的健康的な人が多い。ドラマのように幼いころ近所に住んでいた人と偶然にケアハウスで再会する在日コリアン入居者を何人か目に

多文化を  
ささえる  
人びと

## 母語で喜怒哀楽を 文化的背景に配慮した 在日コリアン老人ホーム「故郷の家」

「故郷の家」は、おもに在日コリアン二世のために、日本社会で老いを迎えるための老人ホームとして、馴染み育ったことば、文化や食生活を提供している。

異なる文化的・社会的環境のなかでエスニックな文化的背景に配慮しようとする高齢者介護からの学びは大きい。

キム チュンナム  
金 春男

大阪府立大学プロジェクト研究教員



毎日の食事は韓日のおいしいメニューがいっぱい。キムチ・梅干しはかかせない



開かれたホームとして、家族と一緒に母の日のおやつバイキング



定期的に来日する韓国からのボランティアたちとの交流。韓国アカデミー少年少女合唱団の子どもたちと風船遊び（故郷の家・京都にて）

※写真提供・故郷の家

両国から寄付が集まり、一九八九年一〇月、堺市に最初の在日コリアンのための老人ホーム「故郷の家（定員八〇名）」が開設された。

筆者は一三年前韓国より来日し、在日コリアンの高齢者施設における介護支援についての研究をおこなうなかで、ソーシヤルワーカーとして「故郷の家」で働きながら、その実情をつぶさにみてきた。そこで実感したのは、単なる物質的環境、身体的介護ではなく、高齢者の安らぎにとってはかつて親しんだ文化環境がいかに大切であるかということであった。

### 高齢者の安らぎをささえる文化的ケア

「故郷の家」では、韓国食を提供し、韓国語ではなしたい高齢者にはできるだけ韓国語ではなしかける。文化を配慮したプログラムとして故郷の生活を再現するための年中行事も盛り沢山だ。毎月の誕生会で職員たちが韓服を着て、韓国の挨拶（クンジョル・両手の甲をおでこにあてて、ひざをつき頭を下げるおじぎ）をすると、「日本に来て初めてこのようにしてもらってとてもうれしい！」と感動の涙を流す場面をよく目にする。このようなお年寄りの感謝のことばで職員たちは逆にやる気や生きがいを感じると口を揃える。

この点、特に、韓国からの研修生は、日本のケアワーカーたちの目が行き届かないところを補ってくれる存在である。例えば、夕食のひととき、在日コリアン入居者と研修生がゆっくりと会話ができる時間をもうけており、普段母語

したことがある。一緒に笑ったり、怒ったりしながら共に生きる喜びを感じつつ歳をとっていく在日コリアンがここにいる。

母国と離れて生活する人びとにとって、個人や家族の支援はもちろん、社会的および公的制度の支援は不可欠である。常に相談に応じしてくれる人、母語や文化が理解できるソーシヤルワーカーの存在は重要である。日本のソーシヤルワーク教育において、外国出身者への文化的配慮や異文化理解を通じた対処できる能力向上のためプログラムは、まだあまりおこなわれていない。保健・医療・福祉専門職者たちはもちろん、国および地方自治体レベルでの多文化サービスを施策として充実させていくことは課題のひとつであろう。さらに施設サービスの新しいあり方が問われる今日、外国出身の高齢者を対象とする福祉サービスの再考は必要であろう。

今日、日本の外国人登録者は二二〇万人にも上るといふ。日本国籍を取得した人も含めれば外国出身者はさらに二、三〇万人はふえよう。一九八〇年代以降来日した中国帰国者、インドシナ難民のなかにもそろそろ高齢期に達する人びとがあらわれることを考えると、移民グループごとの介護やケアの必要性はけっしてコリアンだけの問題ではない。すでに二〇年もの歴史をへて、在日コリアン高齢者を対象として運営されてきた「故郷の家」の経験は、今後解決すべき課題もふくめ、これからの日本社会に多くの学びを提供してくれるであろう。

「故郷の家」 <http://www.kokorono.or.jp>